

九州地域国内肥料資源利用拡大ネットワーク 第6回勉強会

家畜ふん堆肥の利用拡大に向けた 「耕×畜なび」の取組について

JA全農 畜産総合対策部 畜産サステナビリティ推進室

2026年10月13日



畜産業が農地を守る

耕畜連携で国産飼料の生産を広げ、地域の資源をめぐらせる取り組み



① 飼料の生産

国産の飼料作物を育てる。
⇒土が良くなる。
⇒年によって食用作物を育てる。

※農地の保全



② 家畜が食べる

家畜が国産飼料を食べて育つ



③ 堆肥を圃場へ

ふん尿を堆肥にして農地に還す



なぜ、いま循環型農業なのか — 資源をめぐらせて食を未来へ

①輸入肥料への依存



化学肥料の主な原料はほぼ全量を輸入に依存し、価格が高騰。国内の堆肥を活かせば、輸入資材への依存を減らせます。

②ふん尿は未活用の資源



家畜のふん尿は年間およそ8,000万トン。放置すれば環境負荷、堆肥にすれば良質な肥料へ。活かさない手はありません。

③土の力（地力）の低下



化学肥料頼みで土の有機物が減り、地力が低下。堆肥は土を育て、収量と品質を長く支えます。

→ だからこそ、地域の資源をめぐらせる「耕畜連携」が必要

出典：農林水産省「みどりの食料システム戦略」「家畜排せつ物の利用の促進をはかるための基本方針」

日本農業の未来を支える、耕畜連携の4つのメリット

01

肥料コストの低減と地力向上

化学肥料の価格高騰が続く中、家畜ふん由来の堆肥が経営を支える。土壌の保水性・通気性も改善。



02

国産飼料の安定確保

輸入飼料の価格変動リスクを下げ、輸入資材への依存を低減。



03

耕作放棄地・水田の有効活用

飼料用米・WCS用イネで水田を生かし、放棄地は放牧や飼料畑として再生。



04

環境負荷の低減

ふん尿を地域で循環させ、化学肥料を減らし、温室効果ガスの抑制にも寄与

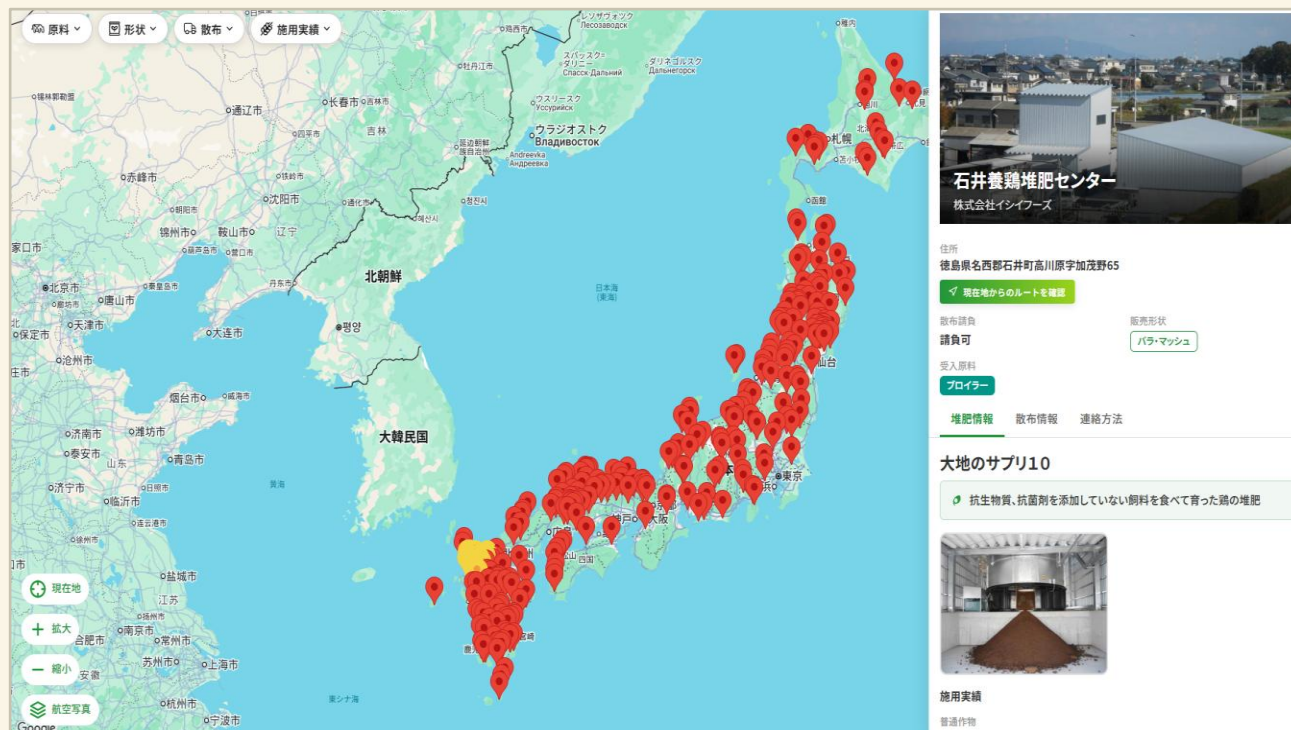


飼料自給力の向上、資源循環—耕畜連携は、これからの日本農業の持続性を支える不可欠な取り組み。

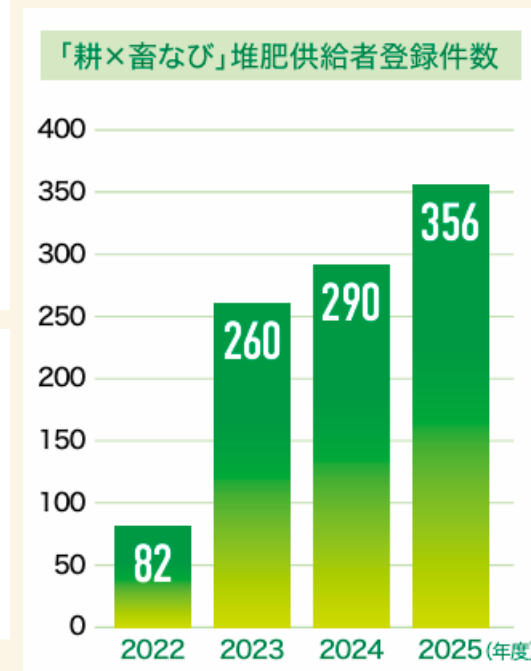
「耕×畜なび」で、耕種と畜産をつなぐ

「耕×畜なび」とは…

全国の堆肥センターや堆肥情報を地図で「見える化」し、堆肥を供給したい畜産農家と使いたい耕種農家をつなぐマッチングツール（2023年公開）



画面イメージ：「耕×畜なび」の検索マップ（全国の堆肥センターを掲載）



佐賀県をモデル地域とした実践

1



畜産農家の登録拡大

県内畜産農家を耕×畜なびに掲載（肥料製造・販売業者届出が要件）

58件

県内畜産農家の新規登録

2



国内資源肥料フォーラム

9月大阪・11月新潟に
「佐賀県堆肥マッチング創出チーム」として出展し、各地の関係者と意見交換

2回

全国フォーラムへの出展

3



小学生への普及啓発

「うんこドリル 食べ物のつながり」を県内全小学校へ配布。
ウェブゲームも展開

約45,000部

小学生向け冊子の配布

4



利用モニター調査

県庁・JAさが職員が伴走し、
耕種農家が検索からサンプル
取り寄せまでを実証

8件

マッチング事例創出

今後の展望



登録農家のさらなる拡大



AIやアプリ化などのweb開発



環境価値の見える化

耕種農家・畜産農家のみなさまへ

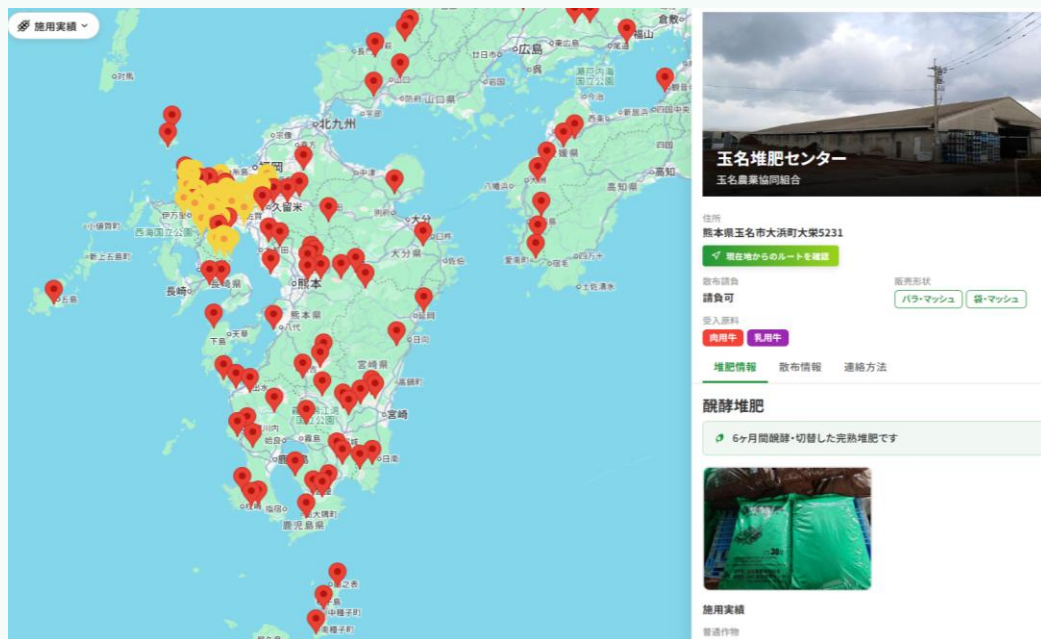


耕畜ナビ

検索

耕種農家のみなさま

まずは、耕畜ナビで探してみませんか？



畜産農家のみなさま

堆肥情報、耕畜ナビに載せてみませんか？

※掲載には、「肥料の品質の確保等に関する法律」に基づく県への届出が要件となります。

情報を登録する

以下のフォームから、堆肥センター情報の新規登録・編集申請ができます。



堆肥センター登録フォーム

新しく堆肥センターの情報を登録します。センターの基本情報や取り扱っている堆肥の情報を入力してください。

フォームを開く →



掲載情報編集申請フォーム

掲載中のセンター情報の編集・取り下げを申請します。変更したい内容を記入して送信してください。

フォームを開く →